

奥野昌綱によるマタイ伝の口語的やわらげ
— ヘボン・ブラウン訳マタイ伝に書き込まれた語彙の分析 —

松 本 隆

The Colloquialization of the Gospel of Matthew: An
analysis of Masatsuna Okuno's notes for the vocabulary
revision of the Gospel of Matthew translated by Hepburn
and Brown

Takashi MATSUMOTO

This paper analyzes the vocabulary in Masatsuna Okuno's notes for the colloquial revision of the Gospel of Matthew, comparing the revised vocabulary to the original words and phrases selected by translators J. C. Hepburn and S. R. Brown who published the Gospel in 1873. Each pair of original and revised word selections is grouped into one of four classes according to the words' respective origins: (1) from *Wago* (native Japanese words) to *Wago*, (2) from *Wago* to *Kango* (words of Chinese origin), (3) from *Kango* to *Kango*, and (4) from *Kango* to *Wago*. Drawing upon *Kango* dictionaries and colloquial Japanese dictionaries published in the relevant period, this paper argues that, with respect to each of the four classes, Okuno successfully revised the vocabulary into colloquial Japanese.

要 旨

本稿は、ヘボンとブラウンによる文語訳マタイ伝（1873年刊）に、奥野昌綱が口語化改訂を意図して書き込んだ草案に注目し、文語訳原文と口語化改訂案が用いる語彙を比較検討した。言い換えの方向性を語種によって、(1) 和語から和語へ、(2) 和語から漢語へ、(3) 漢語から漢語へ、(4) 漢語から和語へ、という4種類に分けて、原文と改訂案の語彙の平易度を

比べた。語彙の平易度を測る参照資料として、明治の初期から中期にかけて出版された漢語や雅俗などに関する辞書類を用いた。各辞書に含まれる通俗平易な語彙と、原文ならびに改訂案の語彙を照合したところ、上記4種すべてにわたり語彙が通俗平易に言い改められていることを確認した。

1. 文語訳『馬太傳福音書』の口語化改訂案と、本稿の執筆意図

おくのまさつな 奥野昌綱 (1823-1910) の自筆による改訂案の書き込みがある 1873 年刊『馬太傳福音書』が香川大学附属図書館に所蔵されている。この文語訳マタイ伝は、ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1911) とブラウン (Samuel Robbins Brown, 1810-1880) の共訳とされるものである (中村 2000: 135, 鈴木 2000: 6)。

中村 (2000) は、奥野の書き込みが「分かり易い通俗語や口語的文体に改めようとする」(縦組み 143 頁) ものであるとし、この改訂案の主要な特徴として次の 5 点を指摘し、具体例とともに挙げている (同 144-145 頁)。(1) 文体を全般的に「ます」体で統一しようとしている。(2) 古典的ないしは漢語的な表現や語彙を通俗的で平易な表現や語彙に言い換えた事例が数多く見られる。(3) 聖書由来の漢語や日本人に馴染みの薄い漢語をやわらげ、分かり易くする事例がある。(4) 尊敬表現の追加も数多く認められる。(5) 文意を明確化するために言葉を付加する事例が散見される。

松本 (2014) は、中村 (2000 横組み 76-115 頁) が翻刻した奥野の書き込みを、語種別 (和語か漢語か) に分類し、ヘボンとブラウンの邦訳原文 (の語種) と対照した。その結果、同じ語種 (和語と和語、あるいは漢語と漢語) 同士の言い換えが大半を占め、異語種間の言い換え (漢語から和語へ、あるいはその逆) は少数に限られることが判明した。そのため、もし奥野の書き込みをもとに文語体から口語体に改訳した場合でも、本書全体の語種構成比率はほぼ維持される、と結論づけた。さらに、本書の口語化が語彙にもたらす影響は、語種の量的な変化でなく、質的な変容であると予想した。

さて、その質的な変容とは、結論を先取りすると、中村が第 2 点目に挙げたとおり、通俗的で平易な語彙への言い換え、ということになる。これは奥野の書き込みを通覧すれば予想できることで、詳しく調査するまでもないと言ってしまうればそれまでだが、本稿では取えてその実証を試みた。

現代的な書き言葉の確立へと向かう明治前期の一般向け書物は、江戸時代以前の素材と異なり、いま我々が目にしても比較的容易に読めるものが多い。今日では見慣れぬ語句に出会う場合も少なくないが、現代語からの類推で文意を理解できたつもりになることもまた多い。しかし時代をへだてた今日の我々が、ある語から受ける印象と、それが書かれた当時の人々の語感とは、多少なりともズレの生じている可能性がある。ある読解素材がどう享受されたかを知るには、その当時の感覚に立ち戻る必要がある。

本稿は、奥野らが活躍した頃に編まれた辞書類を調査し、当時の人々の語感に迫りながら、ヘボンとブラウンの邦訳原文ならびに奥野の改訂案、それら双方の語彙の性格を対照的に浮き上がらせようとするものである。

2. 調査の方法と利用した資料

奥野が、もとの邦訳語を、当時の人々にとって通俗的で平易な語彙に言い換えたことを確認する拠り所として次頁の辞書①～⑯を参照した。後の議論のために、マル数字で通しの整理番号をふった(ただし⑥～⑩は欠番)。

辞書②～⑤は俗語(口頭語)と雅語(文章語)の識別情報を提供してくれる。①と⑪～⑮は漢語辞書、⑯は和英辞書である。明治前期を中心に多種刊行された漢語辞書の大半は、難解な漢語を見出し項目とし、その下に語義や類語を配する体裁をとっている。和語による説明ばかりでなく、より平易な漢語で言い換えることによって語義・語釈とする事例も散見される。漢語を漢語で説明する場合、前者を改まった文章語向きの語、後者を日常的な口頭表現向きの比較的くだけた語として区別し、少なくとも2つの漢語の層が想定できることが以前から指摘されてきた(今野 2011: 42-47, 58-59)。亀井ほか編(1965: 309)は、人々の口に馴染んで日常語と化した後者を「俗漢語」と称した。⑪～⑮は、説明される側の見出し項目でなく、説明する側の語義や類語に含まれる「俗漢語」を知る資料としても利用価値が高い。

①も漢語辞書の一種であるが、⑪～⑮と反対に、平易な見出し項目から、それに相当する硬質な漢語を引く体裁をとっている。いわば⑪～⑮の語義を見出し項目とした逆引き辞典である。したがって①の場合、見出し項目に用いられている漢語は通俗平易な日常漢語である可能性が高い。

辞書①と⑪～⑮については先行研究が語義解説中から収集した漢語を

五十音順に配列し利用の便に供している（①村山 2003, ⑪山田忠雄 1981, ⑫⑬⑭山田俊雄 1977, ⑮亀井ほか 1965）。また和英辞書の⑯についても見出し項目に口頭語を示す「coll (quial)」印のある漢語をアルファベット順に一覧化した表が作られている（亀井ほか 1965）。本稿では、これら先行研究による漢語一覧表を、当該語の平易度を推し量る指標として利用した。②と③は雅俗の言い換え辞書の一種で、②は①と同じく、口頭語向きの「俗」な語句を見出しとし、そこから文章語向きの「雅」調の語句が探せる。③は、前半の雅俗の部と、後半の俗雅の部に分かれ、両方向の検索が可能になっている。辞書④は語のもつ「雅」の傾向、⑤は「俗」の傾向を探るため、第3節の表1ならびに稿末の資料1において利用した。

以下に、辞書①～⑯の『書名』（編著者名、刊行年）、その辞書に関する先行研究、ならびに本稿が利用した複製版の情報などをまとめた。

- ①『掌中漢語早引』（橋爪貫一、1873）より、村山（2003: 265-269）が見出し項目（が本辞書の語義にあたる）中の漢語を約 500 抽出し五十音順に一覧化している。本稿では、松井栄一ほか監修・編集『明治期漢語辞書大系』大空社 1997 年刊「別巻 1」に所収の複製版を使用した。
- ②『俗語雅調』（弾琴緒（舜平）、1891）を本稿では、飛田良文・松井栄一・境田稔信 / 編『明治期国語辞書大系』大空社 1998 年刊「雅 8」に所収の複製版にて調査した。
- ③『雅俗俗雅 日本小辞典 増補再版』（服部元彦、1892）を『明治期国語辞書大系』（上記②参照）「雅 11」所収の複製版にて調査した。
- ④『増補 雅言集覧』（石川雅望 / 集、中島廣足 / 補、1903-04）と『増補 雅言集覧 索引』（木下正俊・久山善正 / 編、1965、臨川書店）を調査した。
- ⑤『増補 俚言集覧』（太田全斎 / 編、村田了阿 / 編輯、井上頼圀・近藤瓶城 / 増補、1899-1900）を調査した。
- ⑪『漢語字類』（庄原謙吉、1869）より、山田忠雄（1981: 333-336）が語釈中の字音語を抽出し五十音順に一覧化している。本稿では『明治期漢語辞書大系』（上記①参照）第 2 巻を参照した。
- ⑫『新令字解』（萩田嘯、1868）より、山田俊雄（1977: 603-606）が解説文中の漢語を約 200 抽出し五十音順に一覧化している。本稿では『明治

期漢語辞書大系』第1巻を参照した。

- ⑬『布令必用 新撰字引』（松田成己, 1869）より, 山田俊雄（1977: 607-611）が解説文中の漢語を約450抽出し五十音順に一覧化している。本稿では『明治期漢語辞書大系』第3巻を参照した。
- ⑭ 14a『漢語便覧』（梅岳山人, 1870）と, 14b『大增補 漢語解大全』（岩井眞二郎, 1874）と, 14c『広益熟字典』（湯浅忠良, 1874）の3種類の漢語辞書より, 山田俊雄（1977: 612-629）が解説文中の漢語1236を五十音順に再編している。本稿では, 14aを『明治期漢語辞書大系』第4巻, 14bを同12～13巻, 14cを同11・19巻に所収の複製版で参照した。
- ⑮『童蒙必読 漢語図解』（弄月亭（横山監）, 1870）より, 亀井ほか編（1965: 307-308）が所収語の解説にあられる漢語を抽出し五十音順に一覧化している。本稿では『明治期漢語辞書大系』第5巻を参照した。
- ⑯『和英語林集成』第5版（ゼー・シー・ヘボン（J. C. Hepburn）, 1894）より, 亀井ほか編（1965: 310-311）が見出し項目に口頭語を示す「coll（oquial）」印のある漢語をアルファベット順に抽出している。本稿では国立国会図書館蔵『[[改正増補] 和英和語林集成』を同館ウェブサイト近代デジタルライブラリー画像情報で参照した。

以上の辞書の記載内容ならびに先行研究が掲げる日常漢語一覧表の情報を判断の指標として利用し, 次節以降, 邦訳原文と改訂案の語彙の平易度を比較検討していく。原文から改訂案への言い換えの方向性を, 語種によって次の4種類に分けた。(1) 和語から和語へ, (2) 和語から漢語へ, (3) 漢語から漢語へ, (4) 漢語から和語への4種類である。分析の対象とした具体的な語句の一覧は, 本稿末資料を参照されたい。

3. 和語から別の和語への言い換え

では初めに, ヘボンとブラウンの邦訳原文中の和語に, 奥野が同じく和語で書き入れた改定案から検討してみよう。奥野は, 文法や文体に関する事項を除き, 語彙に関して全体で延べ922件の改訂案を書き入れている。うち742件を上記分類の(1) 和語から和語への言い換えが占め, (2) 和語から漢語が延べ65件（異なり語で45の対）, (3) 漢語から漢語が51件（31対）, (4) 漢語から和語が64件（36対）となっている（松本2014のデー

タを一部修正)。

このように和語同士の言い換えは膨大で全数調査は難しいので考察の範囲を、本書全体を通して奥野が3回以上言及している語句に限定し(1～2回のみ言及は考察から除外し)、原文から41例、改訂案から43例を抽出した(本稿末の資料1参照)。

下の表1は、ヘボンとブラウンの邦訳原文(《ヘボン》と略す)と、奥野の改定案(《奥野》と略す)の語句が、辞書①～⑤の見出し項目と一致する例の数(異なり語数)をまとめたものである。括弧内の数はその内訳で「+」記号の左側に辞書の見出しの形とはほぼ完全に一致する語句の数を、右側に完全には一致しない語句(活用形の違いや複合要素の一部を欠くものなど)の数を記入した。なお『増補 俚言集覧』(辞書⑤)の「増補」語句は括弧内「+」の右側に含めた。

【表1】和語から別の和語への言い換え

辞書略称	《ヘボン》全41例	《奥野》全43例
①漢語早引	5 (4+1)	23 (6+17)
②俗語雅調	4 (2+2)	17 (10+7)
③雅俗俗雅	4 (雅俗の部)	11 (俗雅の部)
④雅言集覧	36 (34+2)	29 (24+5)
⑤俚言集覧	28 (14+14)	33 (17+16)

表1において原文と改訂案から標本として取り出した和語の用例数は41対43でほぼ同数であるが、辞書①と②の数値は《奥野》の改訂案側が大きく上回っている。①は口頭語的な表現から漢語を引くための辞書、②は通俗語を雅調で表現したい場合に便利な辞書である。①②とも見出し項目と一致する通俗平易な語句の数は改訂案のほうが遙かに多い。

辞書③欄の数値は、左欄《ヘボン》については「雅俗の部」との一致数、右欄《奥野》については「俗雅の部」との一致数を示す(以下、辞書③に関して表2～5も同様)。邦訳原文の語句は③が見出しに掲げる「雅」調の語句とあまり一致せず、それに比べ改訂案の語句は「俗」な語句と一致する事例が多い。これは、奥野による口語化改訂の意図が語彙に反映された結果と見ることができる。一方、原文が使用する語句の「雅」調が弱い

点もまた邦訳の基本姿勢を反映しており、格調を重んじながらも、古風な「雅」に傾きすぎないように配慮したことがうかがわれる。

辞書④⑤を見比べると、《ヘボン》は④雅言の数値が⑤俚言を上回り、逆に《奥野》は⑤俚言が④雅言を上回っているため、《ヘボン》の語彙が「雅」寄り、《奥野》が「俗」寄りのような印象を受ける。その傾向は認められるとしても、双方とも④と⑤の開きは比較的小さく、語彙全体の均衡を崩さない範囲において、それぞれの個性を発揮していると言えよう。

以上この節では、ヘボンとブラウンの用いた和語が「雅」に偏重しすぎていること、そして奥野が日常的な和語を積極的に用いながら改定案を書き入れていることの2点を表1から読み取った。

4. 和語から漢語への言い換え

この節では先の分類の第2の種別、つまり邦訳原文の和語に対する漢語（混種語を含む）の改定案の書き入れ（全45対）について検討する。まず2字以上の漢語（36対）を、次に1字漢語（9対）を取り上げる。

下の表2aは、《ヘボン》の和語ならびに《奥野》の漢語を、各辞書の記載語句と照合し一致する数をまとめたものである。なお《ヘボン》の和語は漢語と関係しないという意味で⑪～⑯の欄に「-」を記入した。

【表 2a】和語から漢語（2字以上）への言い換え（全36対）

	①	②	③	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯
《ヘボン》	16	3	6	-	-	-	-	-	-
《奥野》	19	9	17	13	7	18	29	6	7（延べ125例）

本表の辞書③についても、先の表1③の場合と同じく、《奥野》の改定案が「俗」の色彩を濃厚に示すのに対して、《ヘボン》の原文は「雅」の色彩が淡泊である。辞書②を見ても、改定案による「俗」化の進行が認められる。しかし先の表1②における、《ヘボン》4例に対する、《奥野》17例ほど大きな開きは生じていない。さらに辞書①では、その差が狭まっている。

ここで再確認しておきたいのは、《ヘボン》の和語を《奥野》が漢語でやわらげるといふ、言い換えの方向性である。漢語を用いながら通俗平易

に改めている点に留意されたい。前節の表1で見た和語同士の言い換えでは、辞書①と②の顕著な数値の差異が、改訂による通俗平易化の進み具合を物語っていた。表2aは、表1ほど明瞭でないものの、和語を漢語（2字以上）に言い換えながら通俗化を進めている点に注目すべきである。

奥野は改定案の大半を平仮名で書き入れている。和語はもちろん、漢語にも漢字をほとんど使っていない。語義の視覚的識別に有利な漢字を用いず、平仮名を主用しているのである。目で読み取る書面語でなく、耳で聞いて無理なく理解できる口頭語が、奥野の念頭にあった証しといえる。

では次に1字漢語による和語の言い換え（表2b）を見てみよう。

【表2b】和語から1字漢語への言い換え（全9対）

	①	②	③	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯
《ヘボン》	3	1	1	-	-	-	-	-	-
《奥野》	2	4	5	1	2	3	6	1	1

（延べ25例）

事例が全9対と数少ないので断定的なことは言いにくいだが、奥野の選んだ1字漢語の多くは、2字漢語の場合と同じく日常の使用に適した語であると考えられる。

具体例として「おろか（な）」から「どん（鈍な）」への改訂案に注目してみよう。23章19節の第1文「おろかにしてめしひなるものよ」を「どんにしてめくらなるものよ」に改訂しようとした箇所である。

現代語話者（のひとりである稿者）の感覚からすると「どん」を日常会話で使う機会は今日まれなように思う。しかし、②俗語雅調と③雅俗俗雅「俗雅の部」の見出し項目ならびに、⑫新令字解と⑭漢語便覧の語義中に見える語なので、当時は日常的な会話に用いたのであろう。②俗語雅調には「ドンナ」の見出しの下に「おろか。おそし。にぶし。愚鈍ノ意」と記されている。②は「オロカ」も見出し項目に立てており、その下には「ツタナキ。心オソシ。トモ愚ノ意」とある。

③雅俗俗雅において「愚」は俗雅の部でなく俗雅の部の見出し項目に立てられており、その下に「愚鈍ヲ見ヨ。」とある。そこで「愚鈍」に当たると「おそし・をこ。」とともに「アホウヲ見ヨ。」との指示があるので、その通り「アホウ」を見ると“おれもの・しれもの・をこ。「一ニナル

をる・をこになる。「—ラシイ しれがまし・しれじれし・おれおれし・をこがまし。」と詳しく説明されている。いっぽう雅俗の部に当たると「をこ(名)〔嗚呼〕アホウ・コシヤク・戯・愚・ヲカシイ。」という項目が見える。問題の「どん(鈍な)」については俗雅の部に「鈍ヂヤ おそし・おろか・にぶし・ぬるし。」という項目があり、断定の助動詞「ジヤ」を伴う口頭表現らしい見出しの立て方をしている。

⑩和英語林集成(第5版)で「oroka」の「Syn (onymous words)」から類語を順次たどっていくと以下の項目が一群にまとまる。アルファベットの見出し順に、カナと漢字の表記ならびに類語「Syn.」等を引用し、英語の対訳と例文は省く。「ahō アホウ 阿呆 n. Syn. baka, orokamono, shiremono」「baka バカ馬鹿 n. (coll.) Syn. tawake, ahō」「don ドン鈍 (nibui)」「gu グ愚 (oroka) Syn. baka」「oko ヲコ尾籠」「oroka ヲロカ愚 Syn. gu, don」(orokamono 立項なし)「shiremono シレモノ白痴 Syn. baka, gunin」「tawake タハケ戯氣 n. (coll.) Syn. baka, ahō. 以上の8項目のうち「バカ」と「タハケ」が「coll (oquial)」つまり日常会話に向く語であると見なされている。また本辞書の初版(1867年刊)では「ヲコ」と「シレモノ」に古語・廃語(obsolete)を示す短剣印「†」が付いていたが、1872年の再版から両語の「†」印は削除された(明治学院大学図書館デジタルアーカイブスの画像を参照)。

以上の辞書の記載情報には互いに交錯する点もあるが、語の連鎖から総合的に推論すると「ばか」と「あほう」が日常的な「俗」の側に、「しれもの」と「をこ」は古風で非日常的な「雅」の側にあり、その中間あたりに「どん」と「おろか」が位置する、という俗雅の連続性を想定できる。《ヘボン》が邦訳原文に「しれもの」でなく「おろか」を採り、また《奥野》も「ばか」や「あほう」でなく「どん」を改定案に用いたのは、どちらも極端に走らず中庸をいく節度のある選択と言えよう。

5. 漢語から別の漢語への言い換え

この節では、まず2字(以上の)漢語から別の2字(以上の)漢語へ、次に1字漢語から2字漢語への言い換えについて検討する。

次の表3aは、《ヘボン》も《奥野》も2字(以上の)漢語を用いた事例の集計である。同義(のはず)の2字漢語を同数(22対)用いながら右

端の延べ合計数に大差がついている。合計数が大きいほど通俗平易な話し言葉向きの語が多く含まれることを示唆する（ただし辞書③は「俗雅の部」と照合の場合）。文語体の口語改訳に伴い、2字（以上の）漢語も書面語から口頭語にふさわしい漢語に変更されていることが分かる。

【表 3a】 2字漢語から別の2字漢語へ（全22対）

	①	②	③	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	延べ
《ヘボン》	1	0	0	2	1	2	5	0	1	12	
《奥野》	10	0	3	6	6	10	18	6	1	60	

続いて下の表 3b, 1字から2字以上の漢語への言い換えに目を移す。まず注目されるのが《ヘボン》の延べ合計数の少なさである。本稿末の資料 3b に示したとおり《ヘボン》の①⑬⑭の延べ5例は、すべて同じ「地」である。つまり《ヘボン》の1字漢語のうち通俗性が認められるのは「地」と⑫の「忠」の2語ということになる。先の表 2b《奥野》の1字漢語では、同じ全9例の条件で延べ25例を数える。表 2b《奥野》と、表 3b《ヘボン》を見比べると、1字漢語についても口語改訳に伴う「俗」化の進行ぶりがうかがわれる。

【表 3b】 1字漢語から2字漢語への言い換え（全9対）

	①	②	③	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	延べ
《ヘボン》	1	0	0	0	1	2	2	0	0	6
《奥野》	3	1	2	2	3	3	6	2	0	22

表 3b で次に注目すべき点は《奥野》の延べ合計数の多さである。《奥野》の9例のうち「土地」は、《ヘボン》の「地」と「陸」とに重複対応しており、その分を差し引くと、実際には9例でなく8例の計算になる。それにもかかわらず1字から2字に拡張した漢語、特に「約束（＜約す）」「忠義（＜忠）」「土地（＜地）」の3語が延べ合計数を大きく引き上げている。

6. 漢語から和語への言い換え

この節では漢語から和語へのやわらげを扱う。語句の「やわらげ（和ら

げ)」といえ難解な漢語から平易な和語への言い換えを一般に連想することが多い。ところが本書の場合そうした予想に反し、漢語から和語とは逆方向の、和語から漢語への「和らげ」が、異なり語の数としては上回っているのである（本稿の第3～4節と稿末の資料2と4を参照）。

下の表4aは2字以上の漢語に改定案が和語で書き込まれた事例、表4bは1字漢語に和語の改定案が添えられている事例について、各辞書の記載事項と照合し一致数をまとめたものである。

【表4a】2字以上の漢語から和語へ（全17対）

	①	②	③	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	
《ヘボン》	1	0	0	2	0	2	2	0	0	（延べ7例）
《奥野》	12	6	4	-	-	-	-	-	-	

【表4b】1字漢語から和語への変換（全19対）

	①	②	③	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	
《ヘボン》	3	2	0	0	2	3	8	1	0	（延べ19例）
《奥野》	12	5	3	-	-	-	-	-	-	

表4のaとbの両方とも、辞書①と②の数値において《奥野》が《ヘボン》を大きく上回る。難解な漢語を平易な和語で「やわらげ」という一般的な期待は、表4それ自体を見る限り事実 に即していることになる。

7. 邦訳原文と改訂案にみる和語と漢語の性質

本節では、これまでの議論と一部重複するが、和語と漢語の異なる語種の間での言い換えに関する調査結果を再編し、邦訳原文と改訂案の双方が用いる和語と漢語それぞれの性質を対照的に浮き彫りにしてみたい。

次頁の表5は、すでに個別に検討した表の2と4を比較しやすく合体したものであり、情報の内容自体に新しさはない。表の5a（2aと4aを合体）は和語と2字漢語の対応を、また5b（2bと4bを合体）は和語と1字漢語の対応をまとめたものである。表中の《へ》はヘボンとブラウンによる邦訳原文を、また《奥》は奥野が書き入れた改訂案を示し、さらに「和」は和語の略で「漢」は漢語の略である。

【表 5a】和語と 2 字漢語の対応 (表 2a と表 4a を合体)

	①	②	③	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	延べ	
2a-1 《へ》 和	16	3	6	-	-	-	-	-	-		} 36 対
2a-2 《奥》 漢	19	9	17	13	7	18	29	6	7	125	
4a-1 《へ》 漢	1	0	0	2	0	2	2	0	0	7	} 17 対
4a-2 《奥》 和	12	5	3	-	-	-	-	-	-		

【表 5b】和語と 1 字漢語の対応 (表 2b と表 4b を合体)

	①	②	③	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	延べ	
2b-1 《へ》 和	3	1	1	-	-	-	-	-	-		} 9 対
2b-2 《奥》 漢	2	4	5	1	2	3	6	1	1	25	
4b-1 《へ》 漢	3	2	0	0	2	3	8	1	0	19	} 19 対
4b-2 《奥》 和	12	5	3	-	-	-	-	-	-		

まず 2 つの表の漢語について、異なり数 (右端の「対」の数) の隔たりを勘案しつつ見比べてみよう。表 5a の第 2 列 (2a-2) と第 3 列 (4a-1) を比較し、また表 5b の第 2 列 (2b-2) と第 3 列 (4b-1) を比較されたい。すると、2 字 (以上からなる) 漢語についても 1 字漢語についても、《奥野》の漢語が《へボン》の漢語に比べて、より通俗平易に改められていることがわかる。通俗化の傾向は 2 字漢語の数値 (2a-2) により顕著に現れている。

和語についても同様の傾向が観察される。表 5a の第 1 列 (2a-1) と第 4 列 (4a-2) の各①②を比較し、また表 5b の第 1 列 (2b-1) と第 4 列 (4b-2) の各①②を比較すると、《奥野》の改定案における和語が、より通俗平易に書き換えられていることが読み取れる。

8. 総括と課題

最後に、ここまでの知見を振り返り、今後の課題を掲げて締めくくる。

へボンとブラウンによる文語訳マタイ伝 (1873 年刊) に、奥野が書き入れた口語化改訂案のうち、語彙に関する記述は、同じ語種同士、特に和語から和語への言い換えが大半を占め、異なる語種間の言い換えは少ない。そのため、奥野の書き込みを活かして文語体を口語体に改訳したとしても、

本書全体の語種構成比率に大きな変化は生じない（松本 2014）。

量的な変化は生じないが、文語体から口語体への改訳に伴い、語彙が質的に大きく変容することを、各種辞書との照合で確認した。和語も漢語も話し言葉で用いる通俗的な語彙への入れ換えが進行し、和語はより平易な和語へ、漢語は日常的な「俗漢語」に取って代わる傾向が観察された。

本調査は文語体の口語化に伴う語彙変容の全体像把握に重点をおいてきたため、具体的な語句の考察にはほとんど手を触れていない。本稿末の資料を見ると興味深い例が多数目を引く。類語の連鎖を掘り下げる課題に今後取り組んでいきたい。さらに辞書以外の口語体資料との照合も欠かせない。

宗教書の翻訳は「わかりやすさ」も大切だが、「ただしさ」を前提とし、「ありがたさ」を兼ね備える必要があるといわれる（鈴木 2000: 1-2）。奥野の口語化改訳案は、各種辞書の照合結果から察するに、同時代の人々が親しみを感じる語彙を選んでいるといえる。「わかりやすさ」という点では貢献が大きいものの、優れた翻訳の他 2 条件については疑問を否認しない。通俗平易と「ありがたさ」を両立させるのは至難の技である。また口語体への書き換えが内容にまで波及し「ただしさ」が歪められているのではないかと不安を覚える書き込みも目につく。当時、ヘボンやブラウンや奥野が利用できた、ギリシャ語原典、英訳聖書、漢訳聖書と照合して「ただしさ」の観点から改訂案を検討することで見えてくるものも多いであろう。

参考文献

- 亀井孝・大藤時彦・山田俊雄／編（1965）『日本語の歴史（6）新しい国語への歩み』平凡社、2007年に平凡社ライブラリーとして文庫化
- 今野真二（2011）『漢語辞書論攷』港の人
- 鈴木範久（2000）「聖書の日本語訳：略史と問題」鈴木範久／監修、月本昭男・佐藤研／編『聖書と日本人』大明堂、1～14頁
- 中村博武（2000）『宣教と受容：明治期キリスト教の基礎的研究』思文閣出版
- 松本隆（2014）「奥野昌綱が『馬太傳福音書』に書き入れた口語化改訂案の語彙：ヘボンとブラウンによる文語訳との語種的な異同」アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター『日本研究センター教育研究年報』第3号、51～68頁
http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2014_Matsumoto_a.pdf
- 山田忠雄（1981）『近代国語辞書の歩み：その模倣と創意と（上）』三省堂
- 山田俊雄（1977）「漢語研究上の一問題：漢語層別化の試論」松村明教授還暦記念会編『国

語学と国語史：松村明教授還暦記念』明治書院，593～632頁
村山昌俊（2003）『明治時代語論考』おうふう

資料

『馬太傳福音書』文語訳原文と口語化改訂案にみる語彙の比較

以下の資料1～4は、本文の表1～4に対応している。資料1～4とも、左欄に《へボン》の文語訳原文にみる語句，右欄に《奥野》の改訂案にみる語句を配した。資料1以外は左欄と右欄が対応しペアをなす。辞書①～⑩（本文2節参照）の掲載語と照合し、語形がほぼ完全に一致する場合はマルつき数字，不完全な部分的一致の場合はマルなし数字で示した。一致する要素を見いだせない場合，資料1と2については当該辞書の位置に「-」を記した。資料3と4については誌面の都合上，一致する辞書の番号のみ記し，どの辞書とも一致しない場合は「-」をひとつ記入した。

語句の表記はもとの形どおり，漢字は漢字で，仮名は仮名のまま写した。漢字に施された振り仮名は，山括弧〈〉内に示した。仮名で記された語には稿者の判断で適宜，コロン「:」のあとに漢字をあて，例えば「けしやう（を）する：化粧」のように示した。本例の場合「を」がある形とない形の両方が見られ，そのような場合は括弧に入れて示した。また表記にユレのある場合は斜線を用い「もらふ / もらう」のように示した。

●資料1…和語から和語へ（左右は非対応，各五十音配列）

《へボン》邦訳原文の語句 41 例

《奥野》改訂案の語句 43 例

あたふ：与ふ	---④-	あげる	-----5
あたふ：能ふ	-----	首〈あたま〉	1②--⑤
いたる	---④5	あづかる	---④⑤
いづ：出づ	---④-	いたす	---④5
いづれ	---④-	うけとる	①--④⑤
いと	--③④⑤	うちたたく	①-----
いぬ：寝ぬ	---④⑤	おがむ	①--④-
いのる	-②-④5	おほきく（なる）	1--④5
いふ	1-③④5	おまへ（さん）（かた / がた）	1--④⑤
いやす	-----	おもふ	①2③④5
いゆ：癒ゆ	---④-	仇 / 敵〈かたき〉	1②③④⑤
いる：入る	---④⑤	かなふ	---④⑤
う：得，える	-2-④⑤	衣〈きもの〉	-----⑤
うく：受く	---④5	くださる	1--④-
おこなふ	---④5	くる	-②-④⑤
おほひ（なり）	①2-④5	くるしむ	12-④5
首〈かうべ〉	---④⑤	しらせる	①--④-
かく：斯く	--③④-	する	---④⑤
きたる	---④5	その	12-④⑤
くらふ	---④5	ちかひをたてる	1--④5
ごとし	---④-	つれる	12③④5
衣〈ころも〉	---④5	である	-----

さけぶ	-②-④-	できる	1 - - - -
さる：去る	- - -④⑤	でる	- - - - 5
しめす	- - -④5	どこ	-②③-⑤
しる：知る	- - -④5	どちら	1②③- -
す：爲	- - -④-	とほり	- - - -⑤
たづさふ	- - -④⑤	なほす	- - -④5
たまふ	①- -④5	なほる	- - -④⑤
民〈たみ〉	①- -④⑤	ねむる	- -③④5
ちかふ	①- -④5	ねる	- 2③- -
つぐ：告ぐ	- - -④-	はいる	- - - - -
なす：爲す	- - -④⑤	はなす	1 -③-⑤
なり	- - -④⑤	はなはだ	1②-④5
汝〈なんじ/ぢ〉(ら)	- - -④⑤	はなれる	1②③④-
ほつす	- - - - -	はらふ	- - -④5
むくひ：報ひ	- - - - -	民〈ひと〉/ひとびと	①2-④⑤
むくふ：報ふ	- - - -⑤	まうす/もうす	1②-④5
目〈め〉しひ	- -③④⑤	まゐる	1②-④5
わたす	- - - 4⑤	目〈め〉くら	- -③④⑤
わづらふ	- - -④5	もらふ/もらう	- 2 - - 5
		ゆく	1 -③④5
		よろしい	-②-④⑤

●資料 2a…和語から2字（以上の）漢語へ（左右対応 36 対）

※印の混種語「値段」「牢屋」を含む。右欄の“[”印で上下を括った語（例「いつはい」他）は同一語として扱い、重複箇所「(同上)」と記入し勘定の重複を避けた。説明調の長い語句には注目箇所の仮名に下線を付した。

《ヘボン》右欄に対応

《奥野》改訂案の五十音配列

けがす	- - -	あくこうする：悪口	- - - - -
ともなる	- - -	いつしよなる：一緒	①- - ⑪-⑬⑭⑮-
みつるほど	- - -	いつはい：一杯	①- - ⑪-⑬⑭- -
みてり	- - -	いつはいなり：一杯	(同上)
みつぎとり	1 - -	<u>うんじやう</u> とるやくにん：運上とる役人	①- - - -⑬⑭- -
さとし	①- -	がてんすることはやし：合点	1②③ ⑪⑫⑬⑭- -
とめるもの	- - -	くめんのよき：工面	- - - - -
粧〈よそ〉ふ	1 -③	けしやう(を)する：化粧	- - - - -⑭- -
しもべ	①- -	けらい：家来	①-③ -⑫⑬⑭⑮-
審判〈さばき〉	1 - -	審判〈さいばん〉	- - - - -⑭- -
くつ	- - -	ごうり：草履	- - - - -
足〈たる〉	-②-	じうぶん：十分	1 -③ ⑪- - -⑭- -
盈〈みて〉る	- - -	～になる：十分	(同上)
飽〈あき〉る	- 2 -	～に(する)：十分	(同上)

すゑ	---	しそん：子孫	1-③	--⑬⑭--
あひつぐ	---	しそんのつぐ：子孫	(同上)	
みな	1--	しちにんともに：七人	---	--1314--
つかさどる	1-3	しはいする：支配	1-③	--⑬⑭--
おのれ	--③	じぶん：自分	--3	⑪⑫⑬⑭--
ただしき	1--	しやうじき：正直	--②③	--⑬⑭-⑯
たもてる	---	丈夫〈じょうぶ〉	①-③	⑪-⑬⑭-⑯
ささげる	---	しんじやうする：進上	---	-----
しのぶ	1-③	しんぼうする：辛抱	①②③	---⑭-⑯
かれら	---	にせのぜんにん：(偽の) 善人	---	---⑭--
あたひ	---	ちんせん：賃銭	---	-----
糧〈かて〉	---	くひものきものどうぐ：道具	1--	⑪⑫⑬⑭--
いしずゑ	---	どだい：土台	①--	--⑫-⑭--
なやみ	①--	なんき：難儀	①②③	⑪⑫⑬⑭⑮⑯
直積〈ねづも〉る	---	ねだんをつもる：値段※	--②-	-----
病〈やめる〉	---	病〈びやうきの〉：病気	①--	⑪-⑬⑭⑮-
まづしき	1--	びんばふなる：貧乏	①②③	---⑭--
まづしきもの	1--	びんぼうにん：貧乏人	(同上)	
つみ	1②-	ふちうはふ：不調法	---	---⑭--
ひれふす	1-③	へいふくする：平伏	--③	---⑭-⑯
冥途〈よみぢ〉	---	冥途〈めいど〉	①-③	⑪-⑬⑭--
おもはく	---	おもふやうす：様子	①②③	⑪-⑬⑭⑮⑯
みつぎとり	1--	うんじやうとるやくにん：運上とる役人	①--	⑪⑫⑬⑭⑮
長老〈としより〉	①--	長老〈としより〉のやくにん：役人(同上)	(同上)	
たづさふ	---	ようい：用意	--②③	---⑭--
榮〈さかえ〉に	---	りつばなるにも：立派	①②③	⑪-⑬⑭-⑯
すなどるもの	--③	れうし：漁師	--3	---⑭--
獄〈ひとや〉	---	獄〈ろうや〉：牢屋※	---	-----

●資料 2b…和語から 1 字漢語へ (左右対応 9 対)

《ヘボン》右欄に対応		《奥野》改訂案の五十音配列		
いつくしむ	---	あいする：愛する	--②③	---⑭--
とどめる	1--	きんずる：禁ずる	---	-----
みたまふ	---	ごらんなさる：ご覧	①-③	⑪⑫⑬⑭⑮-
ただちに	---	じきに：直に	--②③	--⑬⑭--
あたひ	---	ちん：賃	---	-----
おろか	①②-	どん：鈍	--②③	--⑫-⑭--
まもる	1--	ばんをする：番	①--	--⑬⑭-⑯
ひとや	---	らう：牢	---	-----
例〈ためし〉	--③	例〈れい〉	--②③	---⑭--

●資料 3a…漢語（2 字以上）から別の漢語へ（左右対応 22 対）

*印の例外「食する, 膳」, ※印の混種語「入用」, ?印の未詳 3 例を含む

《ヘボン》五十音順		《奥野》左欄に対応	
異邦人〈いほうじん〉	-	異邦人〈いこくじん〉: 異国人	1 11 12 13 14 15
淫欲〈いんよく〉	-	淫欲〈いんじのよく〉: 淫事の欲	14
荷擔〈かたん〉	⑪⑭	いちみは: 一味派?	-
偽善〈ぎぜん〉しや	-	偽善者〈にせのぜんにん〉: 偽の善人	⑭
教法師〈きやうほうし〉	-	教法師〈をしへのししやう〉: 教えの師匠	⑭
會堂〈くわいどう〉	-	みだう: 御堂	14?
公廳〈こうてう〉	-	公廳〈おやくしよ〉: お役所	①⑫⑬⑭
祭司〈さいし〉のをさ	-	おほきなるやくにん: 大きな役人	①⑪⑫⑬⑭⑮
主人〈しゅじん〉	①⑬⑭	主人〈だんな〉: 旦那	⑭
食〈しよく〉する*	14	ぜんにむかふ: 膳に向かふ	14?
席上〈せきじやう〉	-	ざしき: 座敷	③
尺寸〈せきすん〉	-	いつしやくかいつすんほど: 一尺か一寸ほど	1 ⑪⑭
地上〈ちしやう〉	-	地上〈ちのうへ〉: 地上	①⑬⑭⑮
天下〈てんか〉	⑪⑫ 13⑭	せかい: 世界	①⑪⑫⑬⑭⑮
入用〈にうやう〉	⑯	入用〈いりやう〉※	① 13 14
人税〈にんぜい〉	-	ひとのうんじやう: 人の運上	①⑬⑭
博士〈はかせ〉	⑭	博士〈がくし〉: 学士	-
萬民〈ばんみん〉	-	萬民〈せかいのひと〉: 世界の人	①⑪⑫⑬⑭⑮
不法〈ふほう〉	-	不法〈むはふ〉: 無法	③⑭⑯
方伯〈ほうはく〉	-	方伯〈おもきやくにん〉: 重き役人	①⑪⑫⑬⑭⑮
預言者〈よげんしや〉	-	むかしのせいじん: 昔の聖人	③⑭
疫病〈ゑきべう〉	-	疫病〈やくべう〉	-

●資料 3b…1 字漢語から 2 字漢語へ（左右対応 9 対）

《ヘボン》五十音順		《奥野》左欄に対応	
師〈し〉	-	師〈し〉しやう: 師匠	⑭
食〈しよく〉する	-	食〈しよく〉じをする: 食事	⑭
信〈しん〉	-	信〈しん〉かう: 信仰	-
地〈ち〉	① 13 14	土地〈ち〉(とち)	①⑪⑫⑬⑭
地〈ち〉ふるふ	13 14	地〈ち〉しんがする: 地震	③ 14
忠〈ちゆう〉	⑫	ちゆうぎ/ちうぎ: 忠義	①⑫⑬⑭⑮
約〈やく〉す	-	約〈やく〉そくする: 約束	①②③⑪⑫⑬⑭⑮
海陸〈かいりく〉	-	とち: 土地	(同前①⑪⑫⑬⑭)
(海陸をめぐり)→うみをわたりとちをめぐり)			
その二その三その七	-	そのじなんそのさんなんそのしちなん: 二男 三男 七男	-

●資料 4a…漢語（2 字以上）から和語へ（左右対応 17 対）

《ヘボン》五十音順		《奥野》左欄に対応	
以下〈いか〉	-	した	-

異邦人〈いほうじん〉	-	このをしへをしらぬ人, かみのをしへをしらざる人	1
飲食〈いんじよく〉	-	飲食〈のみくひ〉	-
義人〈ぎじん〉	-	義〈たゝしき〉人	1
偽善〈ぎぜん〉	-	いつはりのよきこと	1 3
會堂〈くわいどう〉	-	ひとのあつまるいへ	1 2 3
權勢〈けんせい〉	-	かみさま	1
充満〈じゅうまん〉	-	はなはたおほく	1 2
士卒〈しそつ〉	⑪⑬⑭	士卒〈あしがる〉	①
清淨〈しやうじやう〉	-	清淨〈きれい(に) / きよく / きよらか〉	①②③
庶族〈しよぞく〉	-	あらゆるひとびと	1
畑地〈はたち〉	-	畑地〈はたけ〉	-
萬民〈ばんみん〉	-	萬民〈よろつのひと〉	1 ②
綿羊〈めんよう〉	-	綿羊〈ひつし(じ)〉	-
容貌〈ようぼう〉	-	容貌〈かほかたち〉	②③
預言者〈よげんしや〉	-	かみのおつげをうけしひと	1
和睦〈わぼく〉	①⑪⑬⑭	なかなかほり	①②

●資料 4b…1 字漢語から和語へ (左右対応 19 対)

《ヘボン》五十音順

《奥野》左欄に対応

悪〈あく〉	1 ⑭	あしき	①
海陸〈かいりく〉	-	うみ(海陸をめぐり→ <u>うみ</u> をわたりとちをめぐり)	-
義〈ぎ〉ある	① 13 14 ⑮	ただしき	①③
金〈きん〉	-	金〈かね〉	1
銀〈ぎん〉	⑭	銀〈かね〉	1
きん(禁)ず(る)	-	ととめる	1
坐〈ざ〉す	-	すはる, をる	②
師〈し〉	-	あなた	-
死〈し〉す	1 ②⑫⑬⑭	しぬ	①
生〈しやう〉ず	-	はえる	②③
主〈しゆ〉	-	あなた, かみ	①
信〈しん〉ず	-	まことにする	①②
聖〈せい〉なり	-	聖〈きよらか〉なり	-
善〈ぜん〉	14	よいこと	1
全〈ぜん〉	14	まつたくの(全公會→まつたくの公會)	-
拝〈はい〉す	②⑬⑭	おかむ, (お)めどおり	①
命〈めい〉ず	12	おほす, いひつける	①②③
亂〈らん〉	14	亂〈さはぎ〉	①②
爐〈ろ〉	-	爐〈かまと〉	-